A班帰国女適応教育

12月7日議事録

＊前回の宿題

今後の方向性を見直すため、帰国子女の帰国後の言語面における不適合に対して実際に行われている対策はどのようなものがあるかを分析することにした。

＊今日の話し合いの流れ

対策は学校ごとに、多少ばらばらではあるがある程度一定の事がなされていた。（習熟度別クラスでの言語能力アップ、教師へのサポート、帰国生カウンセリングなど）

↓

しかし、

Qそれらは帰国生を日本の学校及び社会に慣れさせるためのものであって文部科学省の方針である個人の個性を伸ばす適応教育ではない。

Q学校が掲げている適応教育は国際生を学校側が獲得するための宣伝広告にすぎない可能性がある。帰国生を取り巻く問題は絶えないので実際に効果があるのか疑問。

Q習熟度別授業を取り入れるという事例が多いが、そもそも帰国生と一般生をきっぱり分けたクラス編成はどうなのか。

↓

現在、帰国生の不適合に対するサポートがされていないわけではないのにもかかわらず、帰国生の不適合がいまだ指摘される点に問題意識を持った。どれほど適応教育を行ったとしてもそれが帰国後であるから効果がないのではないか。

↓

渡航中の適応教育が不十分なのではないか。

↓

渡航先で適応教育をすることによって、日本に帰国後の適応力が高まる！

渡航先で行う適応教育とは、郷土教育（日本語教育込み）を考えている。

＊次回（12/9）

・日本で現在行われている習熟別クラスなどは実際本当に効果があるのか。

・一般生と帰国生をきっぱり分けてしまうことはどうなのか。

・どこに渡航先での適応教区の効果を見出すか定める。

・郷土教育について掘り下げる。

・渡航先には日本文化がないのか。

など

子